

666
102

666-102



1200501573904

推薦圖書目錄

大日本聯合青年團編

第十二輯

昭和十年七月

推薦圖書目錄

第十二輯

大日本聯合青年團



一本

序

發行所寄贈本



大日本聯合青年團は昭和三年以來青年の讀物として適當なる圖書の推薦を行つて來た。

圖書の推薦方法は本團に推薦委員會を設け、委員數名を囑託して、新刊圖書に就き毎年春秋二回委員會を開催し、慎重審議の上青年の讀物として適當なるものを推薦し、その都度小冊子及び日本青年新聞を通じて夫々發表してゐる。

今回の推薦圖書は去る六月六日帝國圖書館に於て、左記委員及び本團田澤理事長、下村囑託、熊谷主事等が出席して、昭和九年十二月から十年五月までの間に出版されたものうち、特に青年の讀物として適當と認めたものを五十一冊嚴選して推薦することとした。

廣く青年團並に青年教育關係方面に於て利用せられんことを切望する。

昭和十年七月

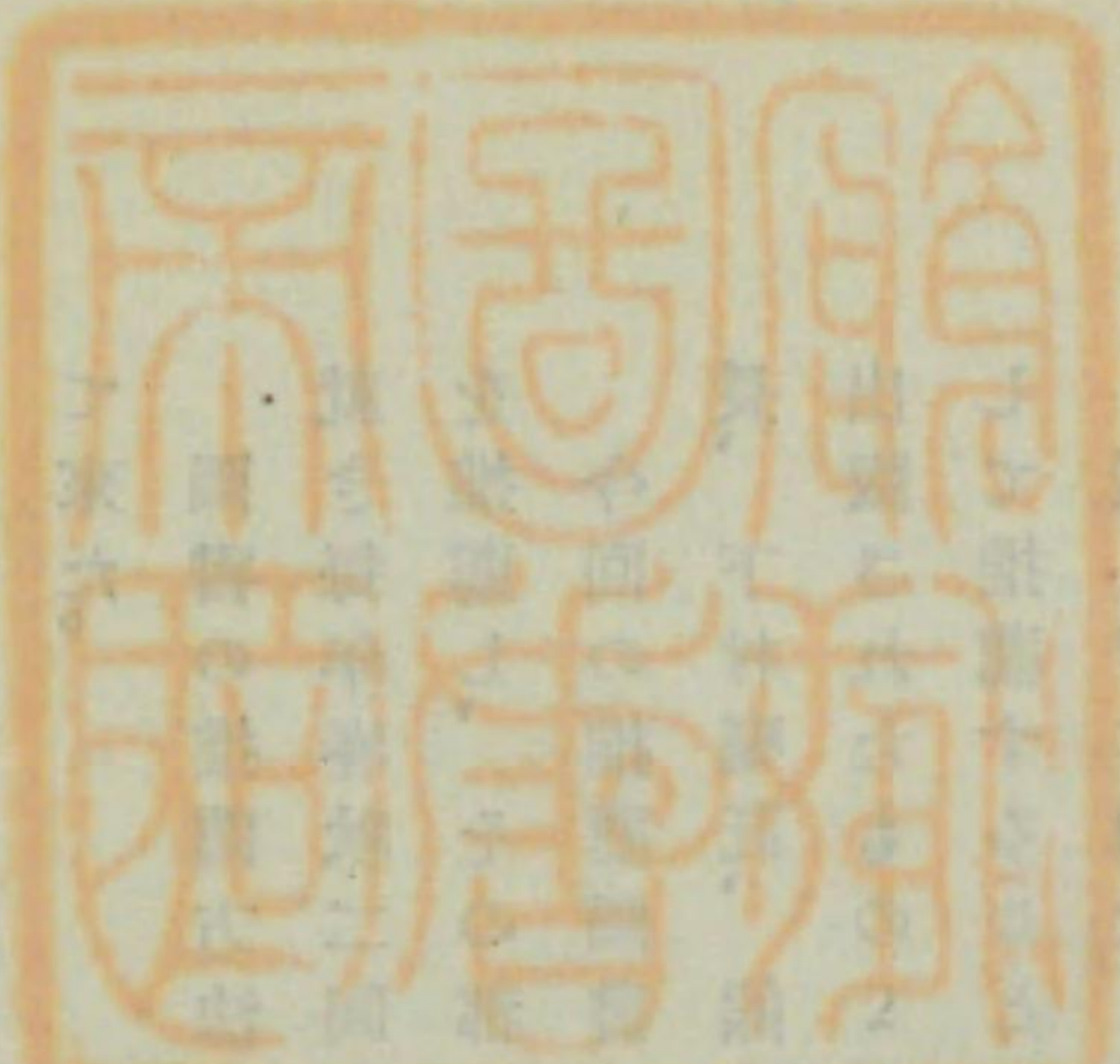
大日本聯合青年團調查部

666-102

修養・處生・教育	一頁
國家・兵事・社會・政治・經濟	一〇
歷史・傳記	一七
文學・藝術	二四
體育	三〇
科學	三三
產業(農・工・商業)	三四

目次

推薦圖書委員



- | | |
|----------------|---------|
| 帝國圖書館長 | 松本喜一氏 |
| 早稻田大學圖書館長 | 林 癸未夫氏 |
| 元東京日々新聞社學藝部長 | 千葉 龜雄氏 |
| 文部省社會教育局青年教育課長 | 朝比奈策太郎氏 |
| 東京帝國大學圖書館司書官 | 小野源藏氏 |
| 文部省 囑託 | 伊藤治郎氏 |
| 帝國圖書館司書 | 岡田 溫氏 |

發行所書齋本



修養・處生・教育

佛敎 聖典 阿含經講義

友松圓諦著

四六判 三〇八頁 一、五〇 第一書房



前著「法句經講義」と同様に、本書もJ O A Kからのラジオの放送講義（昨年十月下旬）に加筆上梓されたものである。元來阿含經と云ふ經典は、釋尊が常平生好んで使はれた聖句を、弟子達がまとめて作つたもので、全部で百八十三卷と云ふ可成大部なものであるが、この放送講義ではその中から代表的な聖句十四だけを選び出し、この十四句を基礎として十四講に分つて阿含經の聖句を説くことに依つて佛敎精神の眞髓を語つてゐる。

説き方は前著「法句經講義」と同様に、經典中の聖句を吾々の日常生活上の諸問題と關聯せしめて極めて平易に説かれ、又引用されてゐる例は吾々が日常生活に毎日繰り返しつゝある具體的事例を採つてゐるので心に訴へる所が直接的で活きてゐる。序文に依ると本書の後半、殊に最後の四句は稍々調子をたかめてあると斷つてあり、事實佛敎々理の問題に論及されてゐるが、勿論之は讀む人の心々に依つて難かしくも易しく

も解されるものであつて、記述そのものは決して難解の字句は用ひられて居ない。前著「法句經講義」と共に愛誦さるべきものであると思ふ。

活ける宗教と人生

吉田 清太郎 著

四六判 四八四頁 一、八〇 雄山閣

本書は三編からなつて居る。第一編「人生と宗教」は昭和八年夏東京高等工藝學校で開かれた人形講習會での講演であり、第二編「信仰の眼に映したる古今の人々」は人に語られた談話の筆録であり、第三編「生活安定の基礎を何處に置くべきか」は「兄弟愛運動」紙上に掲げられたものである。

著者は現在七十有餘の老齡を以て、今尙熱心に基督教の傳導に努めて居られるが、氏の宗教觀は所謂基督教とは少々趣を異にし、氏の云ふ神とは天地の間に概念的に存在するものではなく、大自然の動きの中に神の無限の榮光を見出さうと云ふので、萬有神論的な立場にあるとも見られる。この氏の宗教觀に就いては第一編に詳しい。第二編は著者が七十餘年の過去に於て面接された政治家、實業家、宗教家等の信仰生活について印象觀想を述べられたものであり、第三編はこの著者の宗教觀から生れた生活態度として、物と人と自己に生活安定の基礎をおくことを斥けて、神と良心、この二つの上におく可きことを主張して居る。すべて

が著者の具體的な宗教的體驗が基礎となつてゐるので、記述は平易であるが力強く讀む人の心に迫つて來るものがある。

聖典 孝經 講話

飯島 忠夫 著

四六判 二二二頁 一、三〇 日本放送出版協會

本書は昨年十月初旬、JOAKから聖典講義として六日間に亘つて放送されたものに加筆出版されたものである。孝經は四書五經と共に孔子の教の根本經典の一つで、我國に傳はつて一般に用ひらるゝようになつてからも既に一千二百年の歳月を経て居り、我國の孝行の道に影響するところも極めて大きなものである。放送講義されたのは孝經全篇二十二章中の十六章だけであつたが、本書出版に當つて更に残りの六章を補講して二十二章全篇について講義されてある。

講義の内容は一つ一つ孝經の字句について説明したのではなく、孝經を第一章から順に日本文に直して讀み上げ、その中に含まれた孝の精神について語られてある。記述は平易で誰にでもよく分る。又字句の一つ一つの解釋については「孝經略解」として約六十頁にわたつて卷末に附録の形式で附せられてある。附録としては尙この他に「二十四孝」(これは古來我民間によく傳はつてゐる支那の二十四孝である)、「皇朝二

十四孝」(これは支那の二十四孝になぞらへて作られた我國の二十四孝である)、「本朝女二十四孝」の三つが附せられ、孝經講義の實例を示すものとして本文と併せ讀む便に供されてゐる。因に著者は文學博士で學習院教授である。

四

少年團健兒教本

第二卷 健兒生活篇

少年團日本聯盟編

四六判 一八六頁、三〇 少年團日本聯盟

本書の序卷、第一、三卷は本目錄第十輯に収録されてある。その時説明した通り本書は全十二冊刊行の豫定で、將來「少年團教範」或は「健兒教育法教範」として編纂せらるゝものゝ稿本である。従つて直接少年團健兒の讀むものとして編纂されたと云ふよりは、指導者の爲に出來たもので、健兒指導の精神、いろ／＼の事柄の形式、儀式、服裝等の外形的のこと等を本書に依つて知つて、健兒指導の實際に當るべきである。特に第二卷である本書では、斥候の役目、健兒の仕事、加盟式、階級並に進級の制度、制裝(服裝)、班制、班精神、健兒章並に特技章(特殊の技能を有する者の徽章)、班會議及び名譽會議、健兒記號と健兒禮(三指禮)、少年團歌、團體の編制等について記述されてある。

人生問題と信仰

福島政雄著

三六判 一六八頁、四〇 渾沌社

著者は文學博士、廣島文理科大学教授で、本書には十三篇の短文が收められてゐる。本書の書名「人生問題と信仰」はその中の一篇を以て書名とせられたもので、この一篇は小倉でなされた著者の講演筆記で著者の宗教體驗を土臺に、經典中の物語を點綴しつゝ極めて平易に信仰の問題を説いたもので、眞宗的な香りが多分に存する。この一篇は最も長篇で本書の約半を占めてゐるが、他の十二篇は何れも數頁乃至二十頁位の短文で、雜誌「渾沌」に掲載された感想文であるが、何れも宗教的の香りが高く、行文靜かで幾分の寂しささへある。

精神日本の建設

東郷實著

(農村問題と教育)

四六判 二四八頁 一、五〇 玉川學園出版部

本書の内容は傍題にもある通り、大別して農村の問題と教育の問題との二つに分けて考へられる。序文の中に「我國現下の行詰りの主因は、明治維新以來、我國が西洋の都市中心、黄金萬能、享樂第一主義の物質文

五

化模倣に終始一貫したところに在る」と云つてある通り、著者の本書に於て説く所は一貫して物質文明の排撃、精神日本の建設である。今日の日本は物が心を支配し、人が金に使はれてゐる。そんなことでは精神日本の建設はおぼつかない。この様な論據から、獨逸の文豪ゲーテの傑作で、精神文化が遂に物質文化を征服したと云ふ「フアウスト」の物語、外國模倣の弊害を力説した西郷南洲の話、農政に力を盡して治國の實を擧げた我が上杉鷹山公と獨逸のフリードリッヒ大王の話、農の精神で國難を打開したデンマークの農民の話等を點綴して精神文化の向上を説き、結局愛の神、即ち土壤愛（之は大自然を愛する精神である）、祖國愛、同胞愛等を基調として「天よりも高き」大理想を打ち建て、精神文化の建設に努力をしなければならぬと云ふのが本書全篇を通じての思想である。

禪 學 讀 本

山 田 靈 林 著

四六判 三二五頁 一、五〇 第一書房

禪は生活體驗であつて理屈ではない。従つて知識的に入つて禪の精神に達することはむづかしい。故に由來禪の道は體驗に在つて理論ではない。禪僧が坐禪をなすのもその意味であつて、本書の著者は坐禪を説明して「坐禪は鎔鑪である。自負傲慢、自窟懈怠、かやうなものを一切合財、熔解し淨化し、よろしきに隨

つて自由自在、純眞無垢の生を展開せしめるやうにするものが坐禪である。」と云つてゐる。

ところが我々俗生活をして居る者はそう參禪することも出来ない。そこで勢昔の傑出した禪僧の語録を讀んで僅に禪の精神に觸れようとする。然しその語録が仲々にむづかしく容易に之を讀んで解し得ない。そこで平易に書かれた本書の様な禪學讀本が必要となるのである。然し右に述べた如く、禪は生活體驗であつて知識でないのであるから、本書を讀むにしても唯漫然と話の筋だけを讀んだのでは何にもならず、又讀んでも案外その點ではつまらないかも知れない。讀んだら考へ、考へては又讀み、熟讀含味してこそ初めて本書の如きは味が生ずるのである。

本書はもと雑誌「禪の生活」に十五ヶ月に亘つて連載されたものを集めて一本としたもので、用語の中には佛書その他から引用された可成難かしい言葉が用ひられてあるが、大抵は欄外に説明が附してあつて、意味が分らぬと云ふことはまづ無い。

歎 異 鈔 講 話

梅 原 眞 隆 著

四六判 三六六頁 一、五〇 明治書院

歎異鈔は親鸞聖人のみ教を、弟子の唯圓房と云ふ人が編集せられたものである、歎異鈔の意味については、

本書の初めの方に「歎とは悲歎といふこと、かなしみなげくこと。異とは異義といふこと、異端のこと、異安心のこと、聖人の仰せと異つた流義のことであります。そして鈔とはすぐれたることを引き出してあつめることでもあります。つまり歎異鈔といふのは、親鸞聖人の仰せにあらざる異義を悲歎する書物といふほどの意味であります。」とある。之を見ても分るように、歎異鈔は親鸞聖人の教義の性質を最も明かにあらはしてゐるもので、昔からよく讀まれて來た書物で、全文は十八條に分たれて居る。

本書はこの歎異鈔を京都顯親學苑の梅原眞隆師が、東京並に京都の放送局から、昨春秋十二回にわたつて放送講義をせられたものを、そのまゝまとめて出版されたものである。最初に歎異鈔の基調をなすと云はれてゐる第十條「無義をもて義とす」と云ふ所から講を初め、以下は順次に第一條から講義を進めて第九條に終つてゐる。と云ふのはこの歎異鈔は第十條迄が親鸞聖人の言葉をかゝげたもので、十一條以下は當時の代表的な異義を唯圓房が批判したものである爲、十一條以下は省かれたものと思はれる。猶卷末には附録の形式で、歎異鈔全十八條にわたる意譯と要旨が掲げられてある。

日本精神と儒教

諸橋 轍 次著

四六判 三五頁 二、〇〇 帝國漢學普及會

著者は文學博士で東京文理科大學の教授である。本書は昨夏群馬縣教員學識向上講習會に於て三日間に亘つてなされた講演の速記を出版されたもので、聽講者が主として初等教育に従事される人々であつた關係上、難讀の書ではないが稍々學術的である。

内容はすべて六講に分たれてゐる。その中第一講に於て日本精神の本質を解剖し、併せて儒教との關係が説かれてあるが、第二講以下第六講までの本書の大部分に於ては、専ら儒教の説明に終始せられてある。

元來儒教は我國には古くから傳へられ、殊に徳川時代には官學として非常に研究せられ、古來の日本精神に影響する處も極めて大であつた。然るに儒教の根本である孔子の教、殊に論語に關する平易な解釋は往々見受けるが、孔子の教を基として起つた儒教全般に亘つて歴史的に概觀した平易な本は割合に少い。その意味で本書は内容が稍々學術的ではあるが、儒教史の上に現はれた種々の學說やら問題やらを比較的平易に説き得たものとして、この方面に關心を持たるゝ人々に薦めて見度い。

農村に於ける塾風教育

協 調 會 編

菊判 四五七頁 一、八〇 協調會

同會に於て先年發行された「農村に於ける特色ある教育機關」を増補改訂の上出版されたものである。

内容は國民高等學校、農民福音學校、農村青年共働學校、農士學校その他農村特有の教育機關五十について、その沿革、教育精神、教育方法、現況、諸設備等を個條書に掲げた調査ものである。従つて一般讀者を對象とするものではないが、他に類例を見ない珍しい調査であるので、指導者の參考書として圖書館或は圖書室に備へ付けておけば相當參考になるものである。

國家・兵事・社會・政治・經濟

世界經濟の常識

小島精一著

四六判 二五二頁 一、〇〇千倉書房

世界經濟を平易に概観するものがあつたらと常々心がけて居たが仲々之に適合するものがない。本書は大體に於てこの希望に添ふものであるが、平易と興味と云ふ點でまだ物足りないものがある。著者は極めて具體的に世界經濟の問題を扱つてゐるので、統計的數字や具體的事實の説明に相當力を用ひてゐるため、それだけ専門語の使用も多くなり、豫備的知識も必要となり、又興味的でもなくなる。然し元來が世界經濟と云

ふ大きな問題を扱ふためには、平易にと云つても程度があつて、本書の如きは一般向のものとして先づ上の部に屬する。

内容は三つに分けて考へられる。先づ第一篇に於て、概論的に世界各國の國際經濟政策、貿易政策、植民政策等を通じて、各國に於ける立場の相違にも論及してゐる。第二篇では世界大戰後比較的最近迄の各國の世界經濟の動きについて、又第三篇では最近こゝ數年來の世界經濟事情について述べられてある。

名將回顧 日露大戰秘史 陸戰篇 海戰篇

朝日新聞社編

四六判 各約三〇〇頁 二冊、四五朝日新聞社

卅年回顧 日露大戰を語る 陸軍篇 海軍篇

東京朝日新聞社編

四六判 各約三三〇頁 二冊、七〇東京日日新聞社

今年は日露役戰捷三十周年に當り、之が記念のため各方面で各種の記念的催しが行はれ、その一つとして大新聞紙は殆んどすべて戰役回顧の談或は文を掲げて讀者に見えてゐるが、何れもそれ〴〵特長があつて面白いものであつた。こゝに掲げた二種はその中の代表的なもので、兩方共に日露役に參加された諸將軍の回顧座談會の速記であるが、兩座談會參集の諸將軍の顔ぶれに多少の相違があるだけに、出來上つたこの二種類

の本にも、内容の相違は殆んどないが、記述の方法に自ら相異なるものがあつて、兩方共に讀んでも興味は又別である。何れにしても實戰參加の諸將の實話であるから、小冊子ではあるが貴重な資料として後世に残るものであらう。

日本 の 力

渡邊 鍊 藏 著

四六判 五〇二頁 一、五〇 章華社

本書は明治維新以後、各方面に長足の進歩發展を遂げ、今日國際政治的にも國際經濟的にも遂に世界第一流の地位を得るに至つた我國の、文化並に産業の發展の經路を歴史的に考察し、併せて現在の世界に於けるその實力について解説が試みられたものである。

内容は八章に分たれ、その第一章「總説」は我國の國土、天然資源、人口、國の富等について總括的に概観したもので、全篇の序論とも云ふべき處である。第二章から第七章迄、六章に亘つて、科學、工業、農業、貿易、交通、軍備の六方面についてその發展の歴史並に現狀を述べてゐるが、その述べ方は統計的の數字を基礎として之に解説を附する體のもので、讀み物としては稍々興味は薄い、我國文化と産業の各方面について頗る廣汎に亘つて實際的の知識を與ふるものである。第二章の「科學日本の力」、こゝでは我國文化一般

の史的考察、教育の問題、學術研究の歴史等、第三章「工業日本の力」では主として近代工業について、第四章「農業日本の力」では日本農業の歴史、耕地の問題、農産物の問題、我國全體として見た衣食住の問題から農村窮乏の現狀打開に迄論及されてゐる。第五章は「貿易日本の力」として明治維新以後に於ける世界經濟界に於ける日本の地位について語られ、第六章「交通日本の力」ではあらゆる近代交通機關について述べられてゐる。第七章「軍備日本の力」は云ふ迄もなく日本陸海軍の歴史、現狀並に國防の問題が扱はれてゐる。第八章は以上諸章の結論として「日本の力と世界列強の力」と題し、國際政治經濟界に於ける我國の地位に關して明確なる概念を與へ、躍進日本の進むべき途を、東西兩文化の華を集めた獨自の方向に導かんとするものである。

非常時日本の國防經濟

森 武 夫 著

四六判 二四九頁、八〇 軍人會館事業部

著者は陸軍二等主計正で戰時經濟の専門家であり、この専門的研究の爲に經濟學博士の學位を授與せられた人である。本書は序文にもある通り「非常時日本の國民中堅層の方々に對して國防經濟の諸問題に關して御傳へする」爲に書かれたものである。従つて記述は一般的に平易である。

内容は全卷七章に分たれて居り、その第一章「戦時経済と金融」の項に於て、總論的に戦争と國民経済の如何に密接なる關係にあるかを種々の例に依つて説き示し、平時経済と戦時経済との相違、之に對する國民の心組み等に論及し、云はゞ戦時経済概論の體をなしてゐる。第二章以下は「戦時の農業と食糧政策」「列強の國防と資源」「我國の國防資源」「國防と工業生活」「非常時の國防と財政經濟」「戦時國民の經濟生活」等の項目の下に、戦時に於ける各方面の經濟生活につき、過ぐる歐洲大戰時の各國の事例を引きつゝ、我々の心得べき事柄について平易に解説せられてある。特殊な研究ではあるが、我々國民として一應は心得ておかなければならないことである。

防空の科學

保科貞次著

菊判 三〇〇頁 一、八〇 章華社

防空に關しては本目錄では既に二種類採録されて居り、殊にその中の一つは本書と同じ著者の手になるものであるが、前二書に比して本書は内容稍々詳細である。前二書が専ら空襲をうけた時の國民の種々の技術的注意に關してのみ述べられ、謂はゞ病に犯された時の對症的療法を云爲す様なものであつたが、本書では空襲を起し得る範圍、空襲時に用ひらるゝ敵方の兵器、味方の防空新兵器、新設備、燈火管制、毒瓦斯及びその避難所、防空と河川、道路、鐵道、建築物との關係、その他可成廣範圍にわたつて説明せられてある。防空を必要とするが如き戦争の起らざらんことを我々は心から希望するのではあるが、然し之はいつ何時突發せぬとも限らない事柄である。故に我々は常識としてこの問題に關しては一應の知識を得ておく必要があることと思ふ。

膨脹の日本（新英雄論）

鶴見祐輔著

四六判 三二六頁、五〇 大日本雄辯會講談社

著者は昭和三年に「英雄待望論」を著して新日本に英雄出でよと叫んだ。それから七年、英雄の出現を待つ著者の心に變りはないが、この七年間に世界の歩んだ路に三つの大きな事件が起つた。一つは滿洲事變、二つは米國の經濟的大恐慌と不景氣、三つは歐洲の政治的並に經濟的混亂。この三つの事件が日本へ與へた影響には可成重大なるものがあつて、從來の「集中日本」から「膨脹日本」へと日本の姿にも急變轉を來した。こゝに著者の云ふ集中日本とは、明治の御世に目覺ましく膨脹躍進して日本を世界の一等國にしたが、第二段の躍進のため、一時翼を收めて自己改造、自己完成のために力を内に集中した姿の日本であつて、七年前の「英雄待望論」はこの集中日本を目しての英雄待望論であつた。然し國際情勢の變轉は何時迄も「集中日

本」に停止することを許さず、再び膨脹躍進の時代となつて、現時の日本は之に相應する英雄の出現を待望することゝなつた。本書に於ける著者の意圖はこゝに在るので、内容を三編に分ち、第一編に於て膨脹精神の意義を論じ、第二編で過去の膨脹民族の歩んだ足跡を辿り、第三編に於て新しい膨脹時代の英雄の姿を描いてゐる。そして歴史は個人に於ても民族に於ても、膨脹と集中とを常に交互に繰り返すものである。丁度晝と夜の様に、春夏秋冬の様子に。斯う説いて新時代の青年に力強く呼びかけてゐる。

われらの海戦史

平田 晋 策著
四六判 三五五頁 一、五〇 大日本雄辯會講談社

我國の海戦史として、神武天皇の御東征から筆を起してあるが、本書の主たる部分は日清、日露、日獨の三戦である。全部が青少年向のお話風に取扱はれ、まことに肩のこらない讀物である。日清、日露の海戦については諸君も既に多くを聞き知つて居られるだらうが、歐洲大戦時のドイツの潜水艦戦にはまことに悲惨なるものを見る。大きな商船が、潜水艦の放つ一發の魚雷の爲に幾百の非戦闘員と共に沈んで了ふのは悲惨と云ふより外はない。明治以前の海戦としては神武天皇御東征、神功皇后の三韓征伐、元寇役、秀吉の朝鮮役、明治維新の海戦等である。

やさしい警察論

丸山 鶴 吉著
四六判 一四八頁、三五 新政社

我々は生れてから死ぬるまで、一日も警察の世話にならぬ時といつてはない。其れ程交渉の深い警察ではあるが、之を正しく理解してゐる人は少く、況んや、其のかくれたる職分に對し、感謝する人の乏しいのは何故であるか。本書は警察男とまで綽名される著者が、連續六回に亘つて、公民講座として、JOAKからのラヂオを通して體驗から割出された、警察の實際や、警察の精神や、又民衆と警察との關係等に就いて語られたものを殆んどそのままに編輯されたもので、學問的の議論はない。附録の三篇は、著者が在職中、實際の仕事に當面して、部下や、同僚に示した決心が述べられてある。一讀、警察の知識が得られ眞に警察を理解することが出来る。

歴史・傳記

建國史話

河野 省 三著
四六判 二〇六頁 一、二〇 日本放送出版協會

今年二月初、J O A Kの「朝の修養」として放送されたものに二三の附録を附して出版されたものである。内容に於て次に掲ぐる「古事記講話」と重複してゐるが、説き方には自ら相違がある。次の「古事記講話」は古典古事記の神代の巻のみについて講話を進めたものであるが、本書は古事記に限らず、種々の古典を土臺として建國の歴史を述べたもので、「古事記講話」が天孫降臨迄で止められてゐるに對して本書は神武天皇の建國創業に迄及んでゐる。従つて内容は「古事記講話」の方が精密であり、神代に於ける神々の御事蹟を主にして日本建國精神の由來が一つ一つ古事記の文字に照し合はされてゐるが、本書は寧ろ神武天皇御東征竝に建國創業の御事蹟が中心となつてゐる。この意味で本書と次の「古事記講話」とは切り離せない關係にあるもので、二つ一緒にして初めて神代から神武天皇御建國迄一貫するわけである。尙本書の附録としては「日本書紀（卷三）」「古事記（中巻抄）」「先代舊事本紀（卷七抄）」「古語拾遺（神武天皇の條）」等何れも神武天皇に關した古典の記述、及び「建國の精神と日本精神」と題する一文が附せられてある。

神典古事記講話

植木直一郎著

四六判 二四三頁 一、三〇 章華社

昨年十一月初旬J O A Kから前後八回にわたつて放送された「神典講話」である。

古事記と云ふのは既に諸君も御存じの通り、我國最古の史籍で、今から千二百二十四年前の元明天皇の御代に、天皇の勅を奉じて撰せられたもので、上は神代から下つて推古天皇の御代に至るまでの歴代の御事蹟を記したものである。こゝに神典講話として放送せられたのは、その中の神代の巻だけで、天地開發、神祖伊邪那岐命、伊邪那美命が國土を生み、神々を生み、最後に天祖天照大御神を生み給ひしところから始まつて、高天原の話、須佐之男命の出雲御降下、大國主神の國土經營、天孫邇邇藝命の天降、三種の神器の由來等について講話が進められてある。

この古事記の神代の巻は、我國建國の精神が最も明瞭に現はされたものであつて、まさに「神典」として尊重さるべきもので、之に依つて我が皇室、國家、國民の起源と、その關係と、そしてその發達繁榮の跡を見て、我が國體の萬國無比なる所以を知ることが出来るのである。國民必讀の書である。

尙本書では放送講話を補ふ意味で、卷末に附録として「神代史概観」「古事記譯文」が附せられてある。

明治維新の大業

徳富猪一郎著

四六判 一八九頁 一、〇〇 民友社

内容は「明治維新の大業」「維新史上の二大政變に就て」「宮部鼎藏先生」の三つを集めたもので、何れも

講習會或は講演會に於て述べられたものである。その中でも最初のものが最も長く、又最も一般的で體系的である。

「明治維新の大業」は更に之が三つの部分に分けられてある。その第一の部分は歴史研究に對する著者の態度、むつかしく云へば史論であつて、歴史はすべからく大所高所より縦横に眺め、その中から國民精神と時代精神とを抽出すべきものとして、史上の一小事にあまりこだはり過ぎることはこの著者の採らざる態度である。この態度の下に著者十數年の維新史研究を僅々三十頁の中に壓縮してゐる。第三の部には維新史上の人物及びその背景となつた織田信長以來の爲政者、學者の尊王思想が説かれてゐる。

「維新史上の二大政變に就て」は維新史中の一部分である文久三年及び慶應三年の政變について稍々詳述されたものでいさゝか専門的である。

最後の「宮部鼎藏先生」は幕末肥後の勤王家であつた宮部先生を紹介されたものであつて、平易な記述で宮部先生の全貌を描きつゝ、その背後に維新のあわたしき政情を浮ばせてゐる。

五十年とところ

丸山鶴吉著

四六判 四六八頁 一、六〇 大日本雄辯會講談社

著者五十年の自傳である。自傳と云つても勿論年を追ひ月を接して書かれた所謂傳記ではなく、小學校の頃から最近迄の思ひ出話の數々を年代の順に並べたものである。思ひ出の中に生きた話であるだけに、話には皆やまがある。そのやまが仲々に面白い。著者は現代名士の中でも最も明朗の人として、又いつも變らぬ老青年として一般の若青年から親しまれてゐる。本書はこの著者の明朗さがそのまま描き出されたもので、讀み行く程に著者の人柄が鬚髯として來る。内容は學生時代、内務省の役人時代、朝鮮在任時代、外遊時代、警視總監時代等に分けて見ることが出来る。が、その何れの時代を窺つてもこの著者らしい元氣に溢れてゐる。

大楠公記

社會教育會編

四六判 三五二頁 一、〇〇 社會教育會館

大楠公の湊川戦死後今年は六百年である。之を記念して湊川神社ではもとより、各地で楠公六百年祭の催しがあつたが、本書も楠公六百年祭の記念事業として、平易に楠公の事蹟を傳し、楠公精神を現代に生かそうとして出版されたものである。

先づ「實蹟篇」として後醍醐天皇御即位前後の歴史を簡單に述べつゝ、大楠公が笠置の行在所に召され、いよく國史の舞臺に登場する頃より筆を起し、苦戦に難戦を重ねて遂に湊川に戦死する迄を記述してある。

次に「遺烈篇」として、大楠公の人物を論じ、夫人に就いて語り、又楠氏の一族の忠節を述べ、又楠氏の忠誠の精神が近世の尊王思想に如何に影響したかに就いて物語つてゐる。

大楠公の存在は決して六百年前に終つてゐるのではない。勤王精神の権化として、國民の魂の中に萬代に相傳へらるべき不滅の存在である。今年六百年の記念祭を迎ふるに當り、公の精神を再び想ふことは國民としての義務ではあるまいか。

フォン・ヒンデンブルグ元帥

安達堅造著

四六判 二〇三頁 一、五〇 富山房

ヒンデンブルグ元帥と云へば、昨年夏八十七歳の高齡を以て薨去された獨逸の大統領で、當時我國の新聞紙にも盛んに報導されたことであるから諸君の記憶にも新たなことと思ふ。

元帥の本名はパウ・ルートウイツヒ・ハンス・アントン・フォン・ベネツケンドルフ・ウント・フォン・ヒンデンブルクと云ふのであるが、餘り長いので省略して終りの方だけを呼んでフォン・ヒンデンブルクと普通云はれてゐる。歐洲大戰の時、東部戦線に露西亞の大軍が國境を破つて獨逸國內に殺到した。この時獨逸皇帝のお召しに應じ東部戰場獨軍總司令官として露軍に打ち向つたのが元帥で、元帥は有名なあのタンネ

ンベルクの戦に於て露軍を潰滅せしめて獨逸國民を敵軍の蹂躪から救つた。この時元帥は既に六十七の老齡であつたが、以來元帥は獨逸國民の父としての信望を荷ひ、獨逸帝國が政體に變革を來して共和國となるや、八十の老齡を以て而も無演説、遂に選ばれて大統領となつた。七年の任期を終へて昭和七年大統領の改選期に當つて、國民は再び老元帥を再選したが昨年遂に薨去されたのである。

本書はこの、我國民に於ける東郷元帥の如く、獨逸國民の親愛と信望とを一身に集めた元帥の生涯を傳したもので、讀物としても面白い。

福澤諭吉

石河幹明著

四六判 五〇〇頁 一、五〇 岩波書店

慶應義塾大學の創設者として、又時事新報の設立者として、明治初期の我國文化に不朽の功績を遺した福澤諭吉先生の傳記である。著者石河氏は二十年にわたつて福澤先生から直接に指導を受けられた方で、現在七十有餘の老齡にあられるが、先生を傳するには當代第一人者である。さきに菊判全四卷の浩澣なる「福澤諭吉傳」を著して學界の絶讃を得たが、今回の傳記は前著の餘りに浩澣にして専門的なるを改めて、一般讀書人に讀み易い平易なものとせられたのである。

内容は天保五年、大阪堂島の舊中津藩邸内に誕生せられてより、明治三十四年六十八歳を以て逝去せられる迄の全傳で、専ら正確な資料に依ることを念として述べられてあるので、一見引用文が多くむつかしく思はれるが決してそうではない。逸話逸事を主とした所謂讀物風の傳記ではなく、先生の明治初年に於ける進歩的思想を紹介することに力められてゐるので、讀む方にも多少之を理解し批判するだけの準備が必要で、この様な點で興味本位の傳記に比して稍々讀みごたへがある。が讀めば必ず啓發せらるゝ所のある名著である。

文學・藝術

青嵐 隨筆 九十五點主義

永田 秀次 郎 著

四六判 二九三頁 一、二〇 實業之日本社

著者は謂ふ迄もなく前の東京市長として、又現帝國教育會長として有名であるが、それと同じ位に俳人青嵐として、又釣師高田實（この名は一般的ではないが、釣に行かれる時使用される由）として有名である。

本書はこの著者數年間の隨筆や、演説の筆記や、ラヂオの放送やらを集めたもので、本書に收められた全部が全部青年諸君を對象とされたものでは勿論ないが、述べられた理屈の中に、諧謔の中に、我等の日常生活態度にある暗示を與ふる處が多い。

内容は「私の處世觀」「釣と句と旅と」「卓上演説と挨拶」「放送したもの」の四つに大別せられ、書名の「九十五點主義」と云ふのは「私の處世觀」中の一文の題名で、人は百點即ち完全を主張すればそこに虚偽が生じて来る。九十五點たる事を認識して百點に達せんことに努力する處に眞實があり、又生命があると云ふのがこの主義の論旨で、それをその儘本書の題名とせられた處に、本書に於けるこの著者の主旨が窺はれる。元來が隨筆で、訓話もあれば釣の話もあり、子供に對するラヂオの放送もありと云つた工合に肩のこらないものであるので、一般讀物として一讀を薦め度い。

續 爐邊夜話

乾 信一郎 譯

三六判 二六九頁 一、〇〇 松柏館書店

本目錄第八輯に掲げられた爐邊夜話の續編で、譯者も同一で、内容も同様な動物小説集である。嘗て朝日新聞紙上に連載されたものでその數は十七編、何れも外國のものゝ翻譯で、動物の習性を細かに觀察して小

説としたものである。話の筋そのものが可成興味を呼ぶものである上に、譯文甚だ巧みで面白く、知らず知らず引き込まれて讀み通して了ふと云つてもあながち過言ではあるまい。一つ一つその内容について面白さを説明すると云ふことは紙數の都合上こゝでは出来ないが、讀んで失望することは無い筈である。唯この短篇小説集は何れも動物を主題にしたものであることを承知せられたい。

放送芭蕉を語る

萩原井泉水著

四六判 三六〇頁 一、五〇 實業之日本社

この著者の筆になつたものはいつちも、ある静かさを有つてゐる。この本は各地の放送局で放送されたものゝ速記を集めたものであるが、やはりしづかさの氣に満ちたものである。

内容は「芭蕉を語る」、「俳句を語る」の二部に分たれて居り、「芭蕉を語る」の方に收められた十五篇は何れも芭蕉に關したものでばかりで、芭蕉の旅、句作の態度、作品の解説、芭蕉の「奥の細道」と同じ路を辿つて旅をし、芭蕉の昔を偲んだこの著者の感想等が收められて居る。「俳句を語る」の方に收められた十篇は二三の芭蕉の弟子その他の俳人について論じ、又この著者の俳論數編が收められてゐる。

花ふぶき

小笠原長生著

四六判 四〇〇頁 一、六〇 三幸堂書店

隨筆集で収録されてゐる範圍も廣い。先づ「畏きあたり」と題して 明治天皇の御製、威仁親王、依仁親王の御事蹟についての謹話が掲げられ、次の「大海原に因む史談」には神武天皇の御東征、元寇夜、海賊の話等海に因む史上話が集められてゐる。次の「戦場の追憶」は著者の實際に参加せられた日露戦争の海戦について、又「東郷元帥のことども」では比較的短かい紙數の中に、主として元帥の信念について語つて居られる。「偲ぶる人々」の項では、著者の信念に合致した數人の人々について感想が述べられ、最後の「私と宗教」は佛教入信のこの著者の宗教的體驗が語られてゐる。何れも平易なものである。

はてしなく歩む

齋藤清衛著

四六判 三八〇頁 一、六〇 地上社

初夏のまぶしい光を浴びて、武藏野の一角の假寓を出で、武藏より甲州へ、信州へ、美濃路へ、近江を抜けて若狭へ、そして丹後から山陰の因幡までのこの著者の行脚日記である。その行脚と云ふのが、輕快な今

風の洋服に、汽車や乗合自動車の便を利用してと云ふのではなく、日本の着物に日向下駄、それですたくと大地を踏みしめて、あくまで大自然の光の中に、土地々々の人の情に深く浸りながら、丁度昔の西行の様に、芭蕉の様に、村から峠へ、峠から町へと行程を續けたものである。であるから出来上つたこの行脚日記も、たゞの紀行記と云ふよりは多分に文學的で、殊にこの著者は嘗ては廣島高等師範學校教授として國文學專攻の學者であるだけに、ところ／＼に抜き書きされてある引用文や、名所舊蹟の説明にも並々ならぬ用意の程が窺はれる。云ふ迄もなく本目録の第十輯に收められてある「地上を行くもの」は同じ著者の筆になるもので、前著と並べて折ふし繕くときは、繰り返し繰り返し同じ所を讀んでも盡きない興味がある。

音 樂 讀 本 山 田 耕 筈 著

菊判 二九二頁 一、五〇 日本評論社

近頃ラヂオの普及に依つて西洋音楽は可成一般的に愛好せられるようになった。近頃の様には日常生活が段々國際化され、洋服も着れば西洋料理もどん／＼食べ、西洋建の家に入りもすれば横文字の一つも口にすると云ふ時代になつて来れば、音楽も日本人だからと云つて日本音楽の世界にだけ閉ぢこもつて居るわけに

は行かない。よく日本人に西洋音楽が分るものかと云ふことが云はれるが、音楽を理解するとかしないとか云ふことは可成難かしい問題で一寸解決がつかないが、好きとか嫌ひとか云ふことだけは明瞭に云へることである。理由はないが唯好きだと云ふのが、やがては音楽を理解するに至る道ではないかと思ふ。本書は、この理由はないが西洋音楽が好きだと云ふ人、或は好きになり度いと思つて西洋音楽を聞いてゐる人には誠に手頃な本である。讀本と銘打つてあるだけに記述は極めて平易で、最初に概論的に音とか聲とか民謡とか音楽の形式とかについて述べ、次に著名な作曲家、各種の樂器の説明、管絃樂や歌劇や樂劇の構成やら由來やらの説明、そして最後に伊太利、獨逸、佛蘭西、露西亞等の所謂音樂國の音樂史と云ふ順で簡単に述べられてある。

美術と工藝の話

柳 宗 悦 著

菊小判 一七三頁 二、〇〇 章華社

本書は昨春J O A Kから六回に亘つて放送された講演に加筆されたもので、著者は工藝美術に對して造詣の深いことでは當代第一流の人である。内容は「美術と工藝」「前期の作物」「純正美術」「工藝美術」「實用

工藝「未來の進路」「民藝の趣旨」等の目次が設けられ、一見難讀の書の様に見えるが、通俗を旨とせられたラヂオの講演であるだけに極めて平易で、然も文章はまことに流麗である。

右に掲げた様な目次の下に、元來一體であつた美術と工藝が次第に分離して、今日見るように工藝は純正美術に比して一段と低く評價されるように至つた道程を述べ、之に加へて近頃の傾向として生じた、生活に即して美を求めると云ふ工藝道について語つてゐる。最後の「民藝の趣旨」の民藝は、著者の定義に従へば貴族的な工藝美術に對する民衆的工藝の意であつて、何人の生活にも必要な衣服、家具、食器、文房具、その他所謂下手物（せもの）と呼ばれるものが皆民藝に入るわけである。それ等の民藝の必要を説き、目標を示して健全なる民衆的工藝の方向を示したのがこの最後の章である。尙本書は文部省よりも推薦されてゐる。

體 育

オ ー ル ・ ス ポ ー ツ

春 日 俊 吉 著

四六判 四四六頁 一、六〇 朋文堂

この本は運動競技の技術について書かれたものではない。故に例へば泳ぎ方や、ボールの投げ方を本書から學ぼうとしても、それは無駄である。本書の目的はあく迄も觀衆本位で、野球とはどんな競技か、どんな歴史を持つたものか、日本の野球界の歩んだ道はどんな風であつたか、野球のルールはどんなものか、その外用語とか戦術の解説と云つた様な工合にして、野球、陸上競技、水泳、蹴球、ホッケー、ラグビー、テニス、籠球、排球、スキー、スケート、ボート、ゴルフ、ピンボン、登山、相撲、乗馬、柔劍道、拳闘、レスリング等、凡そスポーツと名のつくあらゆる方面に亘て解説されてある。又卷末にはスポーツの用語辭典迄附され、スポーツ・ファンにはまことに重寶な本である。著者はスポーツ記者として著名である。

ワンダーフォーゲル常識

出口 林 次 郎 編

袖珍判 一七八頁 一、〇〇 奨健會ワンダーフォーゲル部

今日ワンダーフォーゲルと云ふ言葉は、ハイキングやピクニックと同じように我國でも一般に用ひられ、意味から云つてもハイキングやピクニックと大同小異に徒歩を主とした旅行の意に解されてゐる。勿論それで差支ないのであるが、元來ワンダーフォーゲルと云ふ言葉は獨逸語で、渡り鳥と云ふ意味を有つて居り、この

ワンダーフォーゲル運動も獨逸青年の間に起つた極めて民族精神に富んだ體育運動である。その如何に民族的であるかは一九二七年に結成された獨逸青年ワンダーフォーゲル全國評議會で決定された次の十ヶ條の標語（本書二〇頁記載）を見ても分ること、この十ヶ條が今日獨逸のワンダーフォーゲル運動の信條となつてゐる。

- 一、日の光を浴びよ
- 二、浩然の氣を養へ
- 三、自然に親しめ
- 四、卑俗なる流行歌を捨て、民族精神を高揚する民謠を歌へ
- 五、國民の傳説を取戻せ
- 六、祖國の地理を知れ
- 七、祖國に芽ぐむ魂を想へ
- 八、協力せよ、團結せよ
- 九、祖國は唯一つ獨逸國
- 十、民は一つ獨逸民族

本書は二〇〇頁にも充たない小さい本であるが、その中に先づ右の獨逸ワンダーフォーゲル運動の歴史、規約、又之に附隨した獨逸青年宿泊所等に關して述べ、次いで昭和八年天長の佳節に創立せられた我國の健會ワンダーフォーゲル部を紹介したものである。卷末には東京を中心とした一日二日のハイキング・コースが紹介されてあるが、之は東京近在の人々にしか役に立たない。

科 學

細菌の獵人

ポール・ド・クリュー著
和田日出吉譯
四六判 三五頁 一、五〇 昭和書房

かつて時事新報紙上に連載されたものに増補して出版されたものである。全部で十章に分たれ、リユーウエンホツク、スバランツアニ、バストール、コツホ、ルー、ペーリング、メツチニコフ、スミス、リード、エールリヒ等世界の細菌學者をとり上げて、未だ一般的には知られてゐない細菌發見の歴史を述べたものである。之等の學者が如何に寢食を忘れ、時に生命を捨てて迄研究に専心し、その努力に對して知識の神がほゝえみかけるが如き全く偶然の機會に、目的の細菌を發見して驚喜すると云ふ様な道程を、興味深い物語風に描き出されてゐる。細菌學上の知識は全然なくても面白く讀め、學者が人類幸福の爲未開の世界に踏み込んで、如何に苦闘するかと云ふさまが如實に描き出されて讀む人の心を打つに十分なるものである。

産業（農・工・水産・商業）

朝日産業叢書

- 第一輯 農村工業化の話
- 第二輯 軍需農産物の話
- 第三輯 新時代の副業

朝日新聞社編

四六判各約六〇頁各、二〇朝日新聞社

何れも五六十頁の小冊子であるが、農村更生の爲に「農家の協同者」たらんとして朝日新聞社に於て編纂したものである。今後農山漁村の各種の問題について續刊されることと思ふが、現在迄では上記三冊しか出版されて居ない。

第一輯では農村工業化の意義について、又政府の方針、工業化のための組織等について説明的に述べたもので、工業化することの出来る農村の副業などについて實際的の計畫なども示されてゐる。第二輯では先づ軍事經濟と農業との關係を示し、軍需品としての農産物、其等軍需農産物買上の實際及軍需農産物として殊

に需要の大きな綿羊の飼育、養兔等について語られてある。第三輯は新時代の副業として、ハム、ソーセイヂ、ベーコン、トマトの加工品、澤庵、促成栽培による野菜、椿油、ラミーその他について極めて簡單であるが、その製法と處理法について専門家の談話や執筆されたものを集めたものである。以上三冊いづれも簡單で、一つの問題に深く觸れて行くと云ふ處はないが、如何にも新聞社の編輯らしい要領のよさを以て、大づかみに各方面を概観してゐるので、大局を見ながら自らの進路を大過なき方へ導くと云ふためには一讀を要するものと思はれる。

實用園藝

東京府立園藝學校編

菊判 六五七頁 四、五〇 明文堂

元來園藝と云ふものは都會竝に都會接續地に於て云はれることで、多分に趣味的な要素が含まれる。本書も項目を分つて蔬菜、果樹、花卉、菊、花卉裝飾、庭園、盆栽、盆景、養畜、農産加工、病蟲害等としてあるが、何れも都會竝に都會接續地の農村向のものである。更に詳しく云へば蔬菜にしても果樹にしても、都會地近郊に作つて直ちに都會の需要に應じ得るものを主として選び、又花卉、花卉裝飾に至つては全然都會地の需要に應ずるためのものである。



内容が右の如きものであるだけに、都會地に在つて趣味的に園藝に従ふものは固よりであるが、都會近接地に於て都會を相手に仕事をして居る人々には、都會人の嗜好を知る上にも必要と思はれる。執筆者は東京府立園藝學校に奉職せらるゝ諸教諭、諸講師の協同執筆になるもので、それ／＼専門的立場から平易にその實際について記述されてゐる。この種類のものとしては近頃出色のものである。

實用畜産品製造法

金子 平 一 著

四六判 五二二頁 一、八〇、誠文堂

小資本農村工業叢書の一つとして版行されたもので、進歩した近頃の農業化學を應用して、畜産加工と各種の肉製品や皮革の利用法を實際的に、可成微細の點に迄わたつて説明したものである、記述は平易で、多少専門語の使用もあるが、その多くは解釋が附せられてある。

内容は五編に分たれてゐる。第一編は「乳及乳製品」で、乳の質、鑑定、バター、煉乳、チーズ、クリーム等の乳製品が掲げられ、第二編「食肉」は牛豚鳥肉に對する概論、第三編「肉製品」では燻肉、ソーセージ、罐詰、肉エキス、その他動物性油脂工業、骨製品等について語られ、第四編「毛皮の鞣製法」、第五編「毛製品其他」に於て毛皮の保存法、なめし方、羊毛の加工、漂白法、染色法等について説明されてある。

實用林産品製造法

鈴木 好 一 郎 著

四六判 三五二頁 一、八〇 誠文堂

實用畜産品製造法と同じく小資本農村工業叢書の中の一冊で、著述の趣旨も同様に森林化學を多數の人々にもつと普及せしめて、山村の經濟生活に一つの展開を試みようとしたもので、記述はやはり平易で實際に即してゐる。

内容は二十一章に分けられてあるが、内、第一章「木炭の製造」、第二章「木材の乾溜」、第三章「木材纖維の製造」の三章で本書の約半數の頁を占めてゐる。木炭については從來我邦で行はれた製法を科學的に説明し、従つて幾分の改良意見も窺はれる。又西洋流の製炭法の紹介もされてある。木材の乾溜は全く森林化學に屬すること、種々の方式の乾溜法を説明し、又乾溜生産物、例へば木タール、木醋酸、木精等の處理法について語られてある。木材纖維は主として木材パルプに關する説明であるが、又之を原料とする紙、並に人造絹絲に就いても説明が及んでゐる。以下の頁の中に、第四章から二十一章にわたつて漆、タンニン、油脂、ゴム、コルク、澱粉、砂糖、酒精、茸類その他十數種の林産品について項目を設けて説明されてある。

綜合養鶏學

育雛の秘法

鶏の疾病と其の治療法

養鶏生産物の利用及加工法

小柳津友治著

菊判二〇〇頁一、五〇西ヶ原刊行會

板垣四郎著

菊判二二二頁一、八〇西ヶ原刊行會

佐々木林治郎著

菊判二三一頁一、八〇西ヶ原刊行會

「綜合養鶏學」と云ふ叢書名の下に集められてあるが、何れも一冊一冊獨立して出版せられ、内容も一冊づつで完結してゐる。

内容は可成細かな點に迄及んで居るが、主として養鶏の實際家の參考に供せん爲にものせられ、實際を基礎としてゐるので讀んで難解の點は少しもない。「育雛の秘法」は要するに小柳津鶏園主であるこの著者長年の經驗に基く獨特のヒヨコの育て方であり、「鶏の疾病と其の治療法」は農學博士で東京帝國大學の農學部助教授である著者の鶏の疾病に關する設備並に手當法の各方面にわたる解説であり、「養鶏生産物の利用及加工法」は、鶏卵、卵殻、鶏肉、鶏羽、鶏糞等の利用、並に處理法を色々で紹介したもので、この著者はやは

り農學博士で東京帝國大學農學部の助教授である。右の如く本書は養鶏の實際家には益する處極めて大であることを信ずる。

魚と水産業

田中茂穂著

菊判二六六頁二、二〇叢文閣

四面に海を控えてゐる我國は、海の幸だけはまことに恵まれてゐる。然しこの恵まれた海の幸として無盡蔵で無變化で何時迄もつゞくわけのものではない。何事も「やたらに」と云ふことは心すべきで、我國の水産業とてやたらに密漁や酷漁する爲に、沿岸漁業は著しく不振に陥り、之が爲に漁村の荒廢することも甚だしいと云ふ。著者はこの點を憂へて本書に於て當局者と職漁者と學者とが緊密に協同研究して今後の我國水産業を好轉せしめることを力説してゐる。

著者は東京帝國大學助教理學博士と云ふ堅い肩書を持つて居られるが、この著者の筆になるものは讀んで仲々に面白い。本書は魚並に水産業に關する種々の短かい論説や隨筆を集めたもので二十九篇が收められてゐる。その一つ一つに就いて述べることは出来ないが、水産業の將來に對する前に記したようなこの著者の意見、魚の味、養殖、料理等に關する話、食品として又商品としての魚類、魚の價格について、そして又

魚名の方言や通名などについて迄述べられ極めて多方面にわたつてゐる。

四〇

漁村に輝く人々

水産學校長協會編

四六判 四四八頁、九〇 大日本水産會

水産學校長協會は文部省、農林省、大日本水産會、帝國水産會等の後援の下に、今年の紀元の佳節をとり、全國の水産學校卒業業者より業績の優秀なるもの九十八名を選抜表彰したのであつたが、本書はその業績を一般に紹介する意味を以て特に編纂出版されたものである。本書に收められた九十五氏（表彰者九十八氏中本書に紹介されたのは九十五氏）は、或は自家漁業に従事し、或は獨立企業家として、或は官吏、會社員、小學校教員、補習學校教員として刻苦精勵研鑽を重ねて、我國水産業界の發達の爲に一身を犠牲にして寄與貢獻された人々である。本書内容の形式については先年本目錄の第八輯に収録された「農村を更生する人々」と大體相似たものであつて、一人二三頁乃至數頁にわたつてその業績並に閱歴を簡單に述べたものである。

最新 商店經營相談

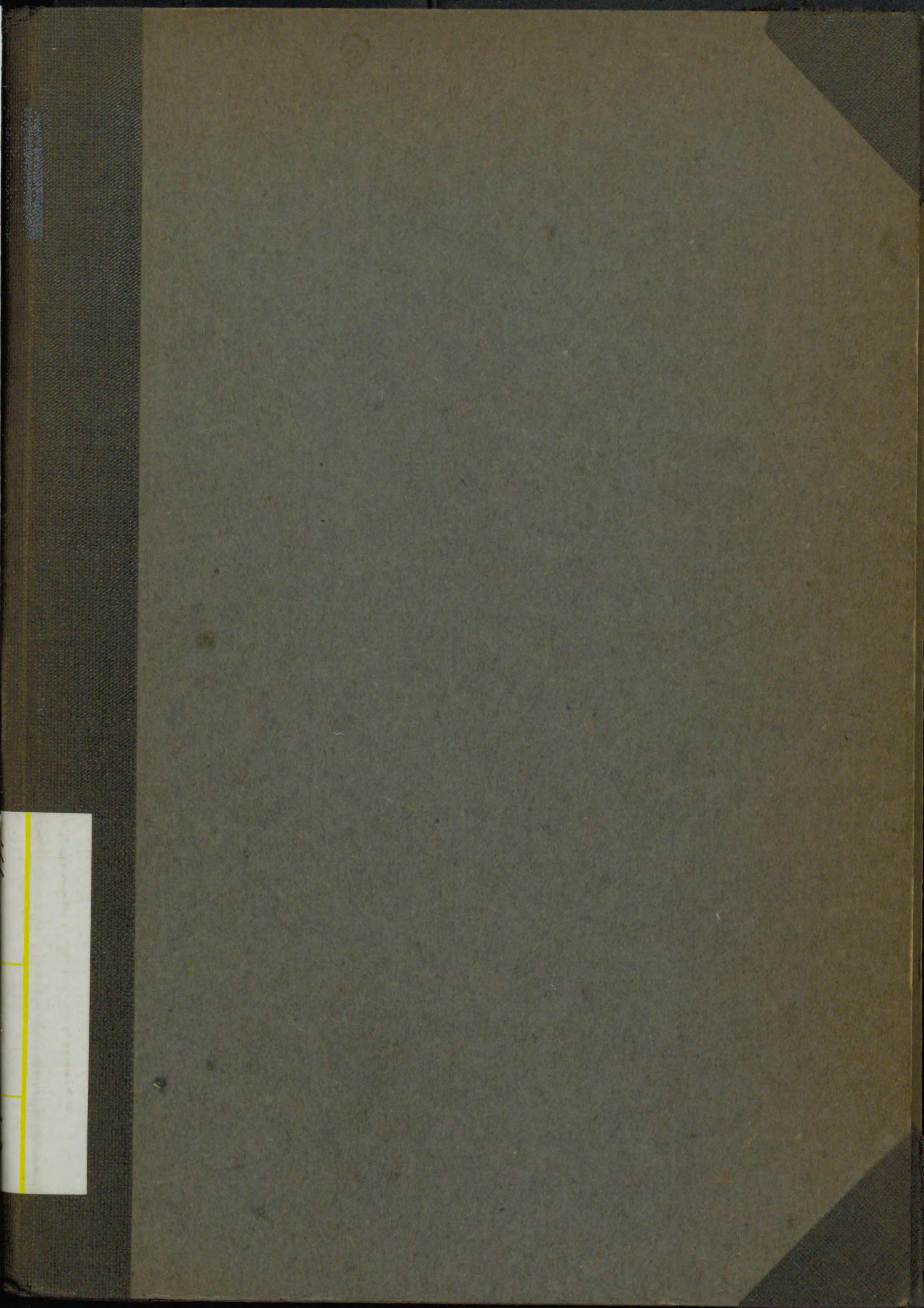
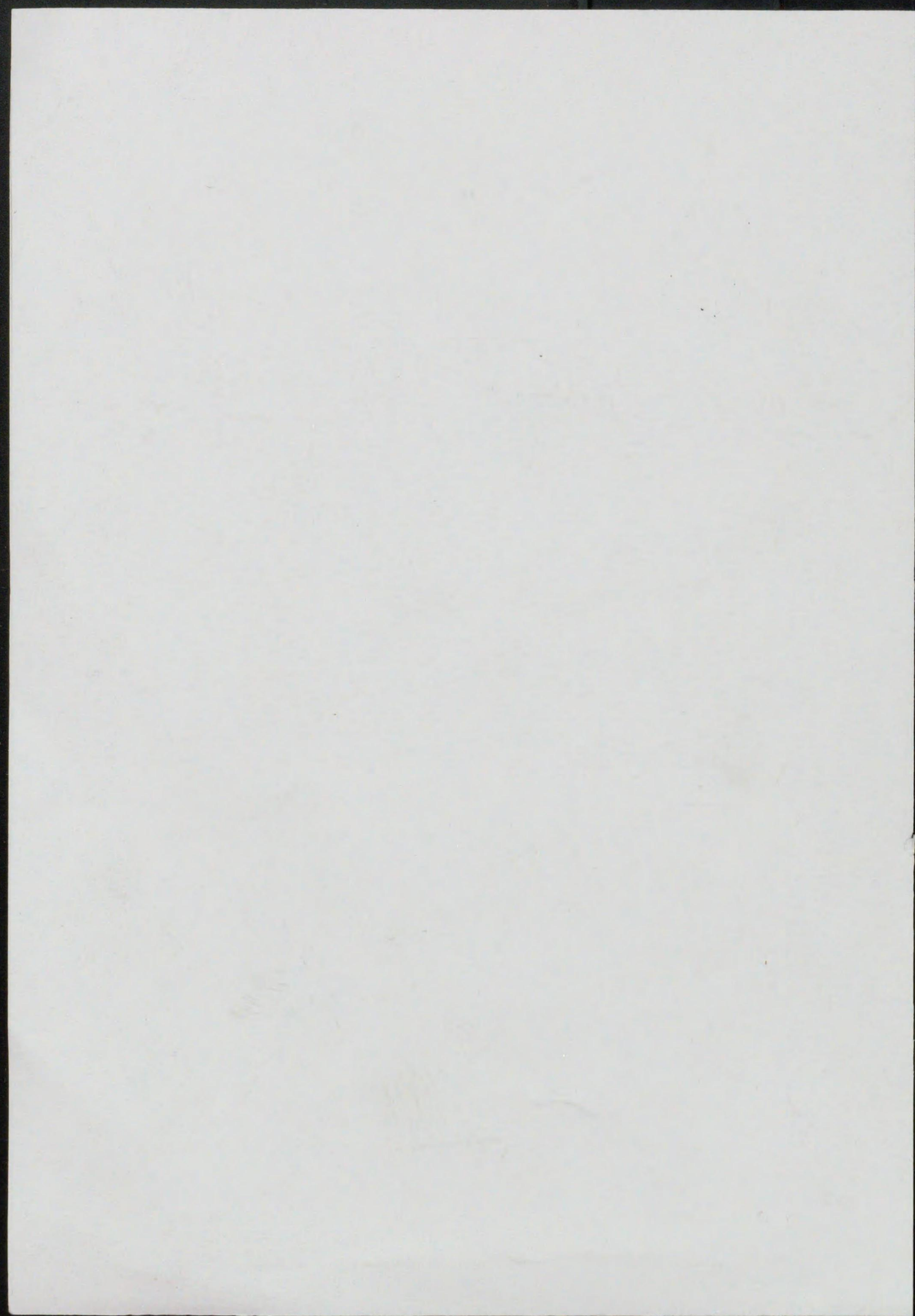
中外商業新報社商店課編

四六判 四四〇頁、一、五〇 千倉書房

「科學的經營」正にこれは一九三五年に小賣店の上に課せられた大きな命題である。「編者はこう云つて、この命題に答ふる爲本書を編して公にすると云つてゐる。序文に依ると、本書は過去二年間に中外商業新報の關係記者が、夫々の専門的立場から各地の商店を實際に訪問研究して、同紙商店欄に日々掲載したもので、中から適當なものを選び出して一本に纏め上げたのである。

内容は「科學的經營編」「販賣商略編」「サービス編」「宣傳裝飾編」「仕入編」「店員統制教養編」「團體的經營編」等の大項目を設け、之等の項目の下に可成多數の小項目を設けて各方面に亘つて實際談を主にして記述してある。聞いて了へば「なんだ、そんなこと迄」と思ふ様な細かい點に迄觸れてあるが、その「なんだ、そんなこと迄」と云ふ様なことが、案外商賣の榮衰に深い關係を持つてゐると云ふ具體的の例を示されると、いさゝか考へざるを得なくなる。記述は一般小賣商從業者の相談相手として書かれたものであるから、極めて平易で、理論めいた處は先づないと云つてよい。この方面の實際に従事して居られる人々には一讀を薦め度い。

666
102

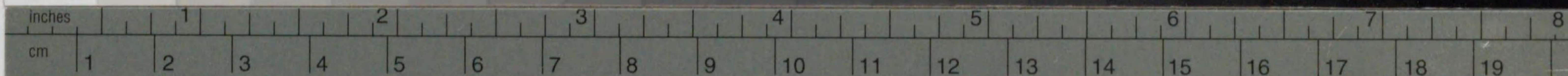
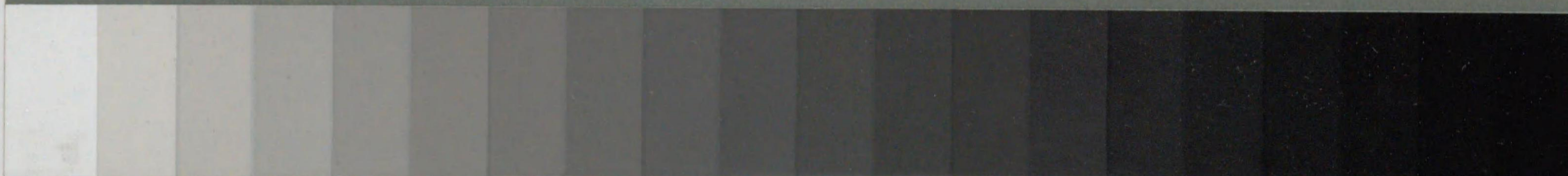


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

